
B02 キリシタン文献の文化横断的研究

研究代表者 米井 力也
大阪外国語大学外国語学部 助教授

研究分担者 エンゲルベルト・ヨルッセン
京都大学総合人間学部 助教授

- 「キリシタンと王法・仏法」(『国文学』1999年7月号、特集・仏教、pp. 52-55、学燈社、1999年6月)
- 「書評：小島幸枝『キリシタン文献の国語学的研究』ほか」(『国語学』197、pp.34-40、国語学会、1999年6月)

B03 「近代社会と古典」

B03 現代社会における西洋古典学の継承 フランスにおける文学研究と文学史の成立

研究代表者 中川 久定
京都国立博物館 館長

「批評」の二分化 文献「批評」と文学「批評」

フランスでは、18世紀半ば頃から「批評 critique」という用語が、明確に異なる次の2つの意味に分化して使用されはじめてくる。第1が、古典古代のギリシア・ラテン語文献の本文確定作業、すなわち「本文校訂」という意味においてであり、第2が、文献の内容にかかわる「文学批評」という意味においてである。前者からは文献の歴史としての文学史が、後者からは学問としての「批評」、すなわち文学研究がそれぞれ生まれてくる。こうした大きな流れをディドロ『百科全書』に基づいて、たどっている。



B03 現代社会における西洋古典学の継承 フランスにおける文学研究と文学史の成立

研究分担者 多賀 茂
京都大学総合人間学部 助教授

以下の二つのテーマを平行して研究している。

1. 近代言語学さらには人文諸科学の源泉としての「文献学」と「語源学」

17世紀、18世紀のフランスにおいては普遍的言語が夢見られ、追究されたのと同時に、諸言語の歴史的研究も発展した。当時の進歩的な思想の基礎にあった歴史批評術、すなわち歴史的な事実の真偽を判定するための様々な方法と知識の総体は、その大半をそれぞれの国語の歴史的变化の研究に負っていたからである。そうした研究から、いかにして言語の歴史的变化の法則性など近代の人文科学につながる発想が生まれてきたのかをあとづけている。

2. 近代的図書館運営の先駆者としてのベネディクト派修道会

古典主義時代の図書館、あるいは蔵書は精選されたある限定された数の書物が、知の総体を代表できるという思想のもとで設計、収集、管理されていた。普通の個人的な蔵書のみならず、大貴族や修道院が持つ公開された図書館についても同様のことが言える。ところが歴史研究の専門家集団とも言えるベネディクト派修道会では図書の収集や管理、とりわけ情報の流通に関して非常に近代的な技術が早くから導入されていた。彼らにとって、図書は知を表象/代表するものであると同時に、歴史的事実に関する記録であった。いわば図書館の古文書館化を彼らは行っていたのであった。